

明治期福岡県小学校の遠足・修学旅行

— 観光基礎教育の歴史的基盤とその理論 —

The Field Trip of Fukuoka Prefecture Grade School in Meiji Era

— A Study on the Historical and Theory of Fundamental Education of Tourism —

経 志江[※]

Zhijiang Jing[※]

要 約

本研究は、観光基礎教育に関する歴史的基盤とその理論的研究に挑戦し、とりわけ太宰府尋常小学校と市杵高等小学校の遠足・修学旅行を取り上げ、その実態や理論の形成を明らかにした。修学旅行は娯楽だけの旅行ではなく、あくまでも「修学」を目的とする旅行であり、各教科を横断的に学習する機会であること、徒歩等旅の苦勞を通じて自然体験や生活体験をすること、教師や生徒同士のコミュニケーションを図ることによって他者を受容する心と自己を実現する力を身に付けることを目指したことを歴史的知見として明らかにした。こうした研究によって、今日の「教育」にあたる「観光」の役割、とりわけその理論構築に歴史的根拠を提示できると思う。

キーワード：観光基礎教育、遠足・修学旅行、小学校

Summary

This thesis will challenge the study of history and theory in fundamental education of Tourism. I had a research on the elementary school excursions of Dazaifu Elementary School and other elementary schools in Fukuoka prefecture in Meiji era. I found out their pictures and the process of theory formation. As historical findings, I showed these: ① the school field trips were not only fun trips but also aimed at “studying”, ② the trips were opportunities of cross-subject learning, ③ the trips were “training” tours to acquire receptive mind to others and ability of self-realization through experiencing hard work like walking tours in nature and group life, and communication with teachers and peers. I wish that this study can show historical backgrounds to present the theory forming of fundamental education of Tourism.

Key words : Fundamental Education of Tourism, Field Trip, Elementary School

1. はじめに

近年、外国人観光客の急増や相次ぐ世界遺産の登録が話題となっている。これに伴い、観光の形態も大きく変わっている。これまで観光とは縁遠かった自治体も、地域固有の歴史や文化など潜在的な資源を発掘し、磨き上げて地域社会の経済や生活に観光の恩恵をもたらし、訪れる観光客に質の高い体験を提供している。こうした主体的な観光は、町の活性化の原動力となり、地域の人々に自己成長の機会を与えてもいる。いわゆる「持続可能な観光」(サステナブルツーリズム sustainable tourism)の誕生である。持続可能な観光は、単に娯楽・消費だけではなく、自ら考える力による地域再発見や、

※日本経済大学経済学部経済学科

文化体験による教養の習得など人間形成に一定の役割を果たしている。自治体によっては、こうした観光が持つ基礎的な教育力を公教育で培っている。観光による収入が県財政の3割を占める沖縄県では、小学校で学校教育用副読本『めんそーれ観光学習教材』を用い、社会科カリキュラムの一環として観光の基礎的な教育を進めている。また、大学と連携して授業や教材の開発にも取り組んでいる¹⁾。

にわかには光が当たり始めた観光基礎教育ではあるが、観光が人間形成に果たす教育的価値に早くから気づき、まさに1990年代からこれを唱えてきた吉川氏は、観光基礎教育を「人間の虚偽や悪意に満ちた人為的なものの醜さを知るためにも、豊かな時間を保障することで自然を機械的に観察するのではなく、いわば受身の立場で全身の感官を研ぎ澄ますことにより、光（生の輝き）を見るための行動を起こし、真の楽しさを実感できる誘いをする教育である」と定義している。さらに、学習指導要領において求められる生きる力に関して、「観光基礎教育は『生きる力』を育む核の教育」と述べている。具体的に吉川氏が注目してきた観光基礎教育の実践は「学校教育の中では、現在修学旅行や遠足のようなかたちで教科外活動の一部に位置付けられている」ものである²⁾。

こうした流れから分かるように、観光の基礎的な教育に関する研究は、その意義の解明や教材・指導法の開発に関わらずかな成果があるが、蓄積はほとんどない。他方、教育学研究の視点から遠足・修学旅行に関する研究は多数あるが、観光的視点が欠けており、管見の限り、教育に与える観光の意義はふれられていない。「児童・生徒たちの旅をする心を育む」と「将来の地域づくりの担い手を育成する」という「観光立国教育の意義」³⁾を具現化するためにも観光の基礎的な教育に関する歴史的基盤やその理論の研究が欠かせない。

そこで、本研究では、これまで取り上げられていない明治期福岡県小学校の遠足・修学旅行を対象に、次の2点を明らかにする。

1 点目は、観光基礎教育の研究視点から明治期福岡県小学校の遠足・修学旅行の実態を解明する。

2 点目は、当時の教員は遠足・修学旅行についてどのように考え、何を求めたのかを解明する。

史料としては、福岡県立図書館郷土資料室に保管されている明治期の教育雑誌、太宰府市公文書館や筑紫野市歴史資料館に保管されている役場文書や明治期小学生の作文帳などを用いる。

2. 明治期福岡県小学校の遠足・修学旅行

(1) 就学率の向上を託された小さな「旅」

1886（明治19）年4月10日に文部大臣森有礼が公布した小学校令によって尋常小学校が生まれ、高等小学校と合わせて初等教育段階を担うものとなった。うち、尋常小学校は義務教育とされた。しかし、当初の義務教育は授業料が有償であった。小学校の経費は保護者から収められる授業料によって賄うことを原則としたため、授業料の負担が増加、就学率が低下した。こうした現象は、『太宰府尋常小学校沿革誌一』（以下、沿革誌）にも1887（明治20）年に「二百余人ノ生徒一時ニ減少シテ、僅カニ七十余名」しか残らなかったと記された⁴⁾。当時、教員は訓導2名と授業生2名、計4名であった⁵⁾。授業生とは正規の教員である訓導の指示に従い授業を助ける無資格教員である⁶⁾。退学者の急増という「創立以来衰微ノ極度」の「惨境」に失望したのだろうか、同年、授業生1名が辞職した⁷⁾。

生徒数からみても教員数からみても学校は破綻寸前の状態に陥った。

大和充彦は1887（明治20）年9月、新学年の初めに首座訓導として当校に赴任した。存亡危機に直面した大和は、ほか2名の教員と一緒に就学督促に力を尽くした。年末になると、在籍生徒は124名、出席生徒は121名に回復した。翌年3月、大和は漸く本校雇（臨時採用）教員1名を採用できた。同月、村の支持も得て、村会決議で「金342円」の予算を取り付けた。こうした功績が認められ、同年4月に大和は当校創立以来の初代校長となった⁽⁸⁾。その直後、大和は学校から5キロ離れた北谷で運動会を開くことにした。さらに1889（明治22）年から年2回の運動会を開いた。4月の「春季運動会」は六本松越で行う予定であったが、雨のため中止した。その代わりに、6月4日に三、四年生を集めて粕屋郡宇美神社（現在の宇美八幡宮）への遠足を行った。10月の「秋季運動会」は針摺野で行った。翌年3月の「春季運動会」は六本松越で、10月の「秋季運動会」は大原山裾野で行った。運動会の場所は毎年変わっていたが、いずれも学校から5キロ程度離れた場所であった。こうした努力によって年末、在籍生徒は315名に増え、出席生徒も310名となった⁽⁹⁾。当時全国的に就学率が伸びたこともあるが、わずか3年間で、太宰府尋常小の生徒数が小学校令公布前の「二百余人」をはるかに超えたことは、運動会の効果があったといえるだろう⁽¹⁰⁾。こうした事実は『太宰府市史』にも取り上げられた⁽¹¹⁾。

しかし残念なことに、就学率の向上に大きな役割を果たした運動会とは何を、どのように行ったのかについて沿革誌から知ることはできない。そこで、太宰府尋常小に最も近い二日市尋常小学校の生徒戸田きくのが書いた作文『運動会』を用いて、当時の運動会の様子を把握する。貴重な史料であるため、ここではその全文を紹介する⁽¹²⁾。

明治三十五年四月一日午前九時半頃学校ヲ出デク太宰府ニ向フ。先ズ榎寺ヲ過ギテ思川ヲ渡リ都府楼ニ達ス。ココマデ細キ道バカリナリテ大ソーヒマガカカリマシタ。サレド此日ハ暑カラズ寒カラズシテ詔ニヨキ天気デアル上ニ右モ左モ青キ麦ヤ美シキ菜ノ花ガアリ、又スミレノ花ヤ空ニサエズル雲雀ヲ見テソワソワ行キマシタ。ソレヨリ戒壇院観世音寺ヲ通り〇太宰府ニツキ、教育品展覧会ヲ見〇〇〇参拝シテ廣キ公園ヲ遊ビマワリマシタ。公園ニハ梅ハチリタレドモ、今ヲサカリノ桃ヤ櫻ハナカナカ見事デアリマシタ。〇〇永ク遊ビ三時頃ニナリテ家ニ帰りマシタ。

運動会の場所は小学校から4キロくらい離れた太宰府であった。朝9時半頃二日市尋常小学校を出発し、榎寺などを経て目的地に着く。「青キ麦ヤ美シキ菜ノ花ガアリ、又スミレノ花ヤ空ニサエズル雲雀」など自然に触れながら「ソワソワ」と行く様子からは、子どもたちの興奮と好奇心が感じられる。いつもの教室を出て歩くこと自体が子どもの心を解き放し、同時に子どもの感性を磨き、学びの意欲を刺激したに違いない。

この運動会の目的は教育品展覧会の参観であったようだが、作文にはその中身についてまったくふれていない。むしろ参拝後の公園での遊びが心に残ったのだろう。「梅ハチリタレドモ、今ヲサカリノ桃ヤ櫻ハナカナカ見事デアリマシタ」と梅や桃、櫻の美しさを目にした喜びが綴られた。午後3時頃までの遊びは、子どもにとってもうひとつの運動であり、目的地までの歩く行為と合わせ、今回の運動会の主体となった。

当時、運動会と遠足はまだ独自の意味を持っておらず、一体となって行われていた場合が多かつ

た⁽¹³⁾。太宰府尋常小で行われた運動会も、今日のような競技を目的とするものとは大きく違って、学校から離れて見学するなど遠くへ出かけるいわば遠足のようなものであったろう。大和はこの運動会を「興学奨励のため」に力を入れて行い、結果的に多数の退学生徒を呼び戻したのである⁽¹⁴⁾。遠足は就学率の向上や学校の授業に興味関心を持たせるためのものであり、その方法として子どもに自然に対する感受性を与えると同時に知性の育成を目指していた。心豊かな子どもを育てようとする当時の教員たちの教育理念が端的に表れているといえる。

こうした成果を維持するため、大和は「明治二十七年四月一日卒業生及四学年生徒ヲ引率シテ郊外運動ヲ催ス。道筋内山ヲ経テ北谷ニ移リ^{不明}○川ヲ経テ帰校ス。内山下宮北谷新宮境内ニ於イテ体操遊戯等各種ノ運動ヲナシ」と、さらなる挙措を打ち出した⁽¹⁵⁾。この「郊外運動」について大和は「参観人甚多ク不就学奨励ノ為効果ヲ多ルコト少カラス」と総括した。郊外運動は子どもの心を取り戻すのみならず、父兄の支持も得られたのである。

運動会や郊外運動の展開に伴い、遠足も次第に定着した。大野村外七ヶ町村学校組合事務管理者であった筑紫郡長広辻信次郎が1904（明治37）年に提出した「事務報告」には御笠南高等小学校が1903（明治36）年3月27日に「本年卒業女生久留米地方へ遠足。訓導岡部恒吉外一名付添出張」、同年4月18日に「全児童ヲ二分シ粕屋郡宇美村及ビ四王寺山へ遠足運動ヲ行フ」、10月24日に「全児童城山へ遠足運動ヲナス」と記録した。御笠北高等小学校が同年2月28日に「住吉高等小学校男四学年生六十余名修学旅行ノ途次立寄り、本校四学年生徒ト野球ノ競技ヲナス」、同年5月2日に「学術研究ノ目的ヲ以テ男四三学年生ハ県立農学校農事試験場へ、男二一学年生ハ竈門山へ、女子全体ハ粕屋郡宇美地方ニ遠足ヲナス」といった記録がみられる⁽¹⁶⁾。学校教育の普及に果たした小さな旅の役割は、こうして認識されるようになった。

（2） 教育の真価を問う修学旅行

修学旅行の起源は初代文部大臣森有礼が奨励した軍事教育の「行軍」であった。森は学校の役割は「国民の形成」とした。この「国民」は天皇に統治される臣民であった。それを実現するため、森は「師範学校令」の第一条に「生徒ヲシテ順良信愛威重ノ氣質ヲ備ヘシムルコトニ注目スヘキモノトス」というただし書を付し、三氣質をもつ教師の養成に力を入れた。しかし、このような氣質を教室内のみで教えることは難しいと考え、森は師範教育改革によって軍隊的要素を導入することにした。結果、東京師範学校を東京高等師範学校に改組する際、初代校長に現役の軍人山川浩を任命した。当時の教頭だった高嶺秀夫はこのような改革に抵抗し、とりわけ単なる「行軍」には疑義を唱え、そこに「学術研究」の要素を取り入れた「修学旅行」を提唱した⁽¹⁷⁾。こうして、1886（明治19）年12月の『東京茗溪会雑誌』に「修学旅行記」という記事が掲載され、これが「修学旅行」という名称の初出となった⁽¹⁸⁾。以降、「行軍」と「学術研究」は修学旅行の重要な柱となった。

太宰府尋常小がはじめて修学旅行を行ったのは、1896（明治29）年であった⁽¹⁹⁾。それは博多への日帰り汽車旅行であった。この年の卒業生は60名であった。町役場も協力して書記1名を同行させた。旅行費の一部は町の教育費から補助された。「午前九時四十分発ノ汽車ニテ博多ニ下車シ、博多箱崎名島香椎ヲ巡遊シ、六時廿四分香椎発ニ汽車ニテ帰」る行程であった⁽²⁰⁾。引率する教員たちは、この

生きた教育の機会を逃さず「地理歴史其他各科」など横断的に結び付けて説明し、「生徒ニ鴻益ヲ与シ事」が少なくなかった。明治期福岡県尋常小学校の修学旅行の実態がほとんど知られていない中、この記録は極めて意義が大きい。

明治期福岡県高等小学校の修学旅行に関する記録は散見できる。上述した沿革誌には、那賀郡井尻高等小学校が1892（明治25）年5月13日からの太宰府修学旅行、同郡内の御笠高等小学校が同年11月5日からの郡内修学旅行を行ったことが記録されている。いずれも太宰府に一泊し、太宰府尋常小学校を訪問したのであった。那賀郡井尻高等小学校生徒が太宰府で1泊2日の修学旅行を行った際、太宰府尋常小の職員は菓子を贈って交流を図り、その返礼として井尻高等小学校一行は太宰府尋常小学校の運動場にて喇叭を吹奏した。御笠高等小学校は郡内修学旅行を実施する際に太宰府尋常小教職員が金70銭を義捐し、交流を図った。太宰府尋常小はこうしたたくさんの修学旅行に接したことで、経験を得、後に自校が修学旅行を行う時の参考になったと考えられる。また、前出した「事務報告」に、御笠南高等小学校は1903（明治36）年3月6日に「男第四学年生一泊掛ニテ三池郡地方へ修学旅行ス。校長芳村御里外二訓導付添出張」、御笠北高等小学校は同年10月8日に「本日ヨリ三日間教員引卒ニテ男四学年生ハ脊振山平等寺城ノ山等へ修学旅行ヲナス」と記録されている⁽²¹⁾。しかしその詳細は、分からない。

高等小学校修学旅行について詳細に紹介したのは『福岡県教育会雑誌』の記事である。それは、市杵高等小学校が1891（明治24）年11月19日に実施した3泊4日の久留米・太宰府修学旅行と⁽²²⁾、1908（明治41）年10月13日に安野高等小学校が実施した1泊2日の博多修学旅行である⁽²³⁾。ここでは市杵高等小学校（以下、市杵高小）の修学旅行を取り上げ、その実態を覗いてみよう。

市杵高小の修学旅行は「山川神社招魂祭（高山彦九郎氏ヲ主メ久留米藩勤王ノ士其他佐賀熊本戦死ノ士ヲ祭ル）ニ参拝シテ忠君愛国ノ志気ヲ涵養シ且ツ地理実験秋気運動ヲ兼ヌ」ことを目的としていた。忠君愛国教育のための山川神社招魂祭への参拝、地理や実験など実践的な学びや体験、そして運動は、今回の修学旅行の内容であった。

その行程は以下の通りである。

1日目。里程7里。朝8時出発→田主丸法淋寺→昼食→田主丸高等小学校→飯田町善導寺（水縄山地理の説明、寺の歴史や所蔵宝物等見聞）→発心城跡（低地、堤防、水害等の説明）→宿。

2日目。里程普通里程3里、汽車里程13里余。朝6時半出発→高良山古見岳（菊池武光少弐頼尚の戦いや豊臣の陣所、英彦山、宝満山、背振山、九州山系や河流平野の説明）→永世和平碑→玉垂宮（宮の建築、年代、由来、杉植や蘇鉄植物の説明、柳川地方を望む）→かむろ石→愛宕神社（山川神社参拝の練習、高山氏勤王事跡の説明）→御井町安養寺（休憩、事務所より祝餅をもらう）→招魂所＝山川神社（喇叭を持って参拝式）→合川村風水神社にて昼食→久留米（赤村社、高山彦九郎墳墓扁照院）→停車場＝久留米駅（汽缶の装置、列車、軌道の説明。乗車して物理試験）→二日市駅着→二日市高等小学校→宿。

3日目。里程6里26丁。朝7時出発→水城村→水城→宝満隠し（宝満山に雲の掛る理、四天寺山の古跡、天拝山、湯町の説明）→都府楼遺趾（太宰府の説明、礎石遺瓦を見る）→太宰府天満宮（神酒頂戴。道真公ノ事跡心字池の説明）→観世音寺（小野道風の額、牙石、古代の鏡、舞楽の面、

古仏等の説明) → 昼食 → 「山越して針摺に出て此処にて談話」 → 夜須郡朝日村 (孝子弥四郎の墓を遙拝し、弥四郎の事跡の説明。夜須の朝日の弥四郎は親に孝行尽すなりの今様を歌いつつ、進んで甘木に着す。其間松延の大溜池を見る。投石の技を競はしむ) → 甘木高等小学校 → 宿。

4日目。里程5里30丁。朝7時出発 → 比良松高等小学校 (檀畑殖産の説明) → 恵蘇宿着 (宮の参拝と説明) → 昼食 → 栗山大膳亀射場 → 久喜宮 (仙人掌の説明) → 久喜宮尋常小学校 (体操披露) → 杷木村 (筑後川を渡る) → 市杵校帰着。

行程から少なくとも3点の特徴が見られる。

1つは、徒歩の時間や距離が長いことである。1日目は「7里」、2日目は「乗車して物理試験」があったため「3里」、3日目は「6里26丁」、4日目は「5里30丁」であった。汽車に乗った2日目を除き毎日5里以上歩いていた。当時1里は約3.9キロなので、多い日は一日28キロを歩いたことになる。ここで修学旅行を行った四年生は現在の中学校二年生に相当する。現代の子どもと比べると圧倒的に日常生活で歩くことが多かったといっても、14歳の子どもにとって、一日28キロの徒歩は決して楽ではないと思う。4日の旅の間、歩くこと自体の苦労はいうまでもないが、苦しみや困難に直面する際、集団における子ども同士の協力や助け合いも沢山あったに違いない。教員の力に頼るだけでなく、自分の成すべきことを見つけ出し、成すべきことを成さなければ、困難を乗り越えられないはずである。人間形成の視点からみれば、集団的な長距離徒歩旅行はまさに自分探しの旅であり、自己実現の旅である。一方、普段村から出る機会がほとんどない時代の子どもにとって、この修学旅行は実に新鮮であり、多くの楽しみも盛り込まれていた。途中の大溜池では「投石の技を競はしむ」などして子どもらしい遊びも取り入れた。旅の楽しみは苦労と困難があるからこそ味わうことができることを子どもたちに体感させた瞬間であろう。

2つは、学ぶ内容の多さである。名所や名物を見学する他、教員による多くの「説明」があった。その内容は地理や実験、歴史や植物にも及んだ。修学旅行はまさに各教科を横断的に学習する機会として捉えられたのである。

3つは、旅先の高等小学校への参観である。毎日必ず一校を参観した。他校の子どもとの交流を図り、学校教育に対する理解を深める意図があったと思われる。さらに、尋常小学校にて体操を披露し、尋常小学校の生徒に先輩としての雄姿を見せ、高等小学校生徒への憧れを抱かせただろう。

徒歩による体づくりや自然性の涵養、集団活動に現れる困難を乗り越えるための自発性の促成、教科学習や教科間の横断的学習の促進、学校教育の普及など修学旅行の教育的価値がこの時代に認識されるようになった。結果、修学旅行に関する予算も増加する傾向が見られた。「福岡県筑紫郡大野村外七ヶ町村学校組合明治三十七年度歳入出総計予算」によると、1903 (明治36) 年度の修学旅行費49,100円に対し、翌年度の予算は58,400円に上がり、約2割増やした⁽²⁴⁾。

修学旅行の普及に伴い、その方法論については多くの問題点が指摘された。修学旅行の理論はこうした指摘によって形成された。次はその方法論や理論について考察してみよう。

3. 修学旅行に関する理論の形成

(1) 教育的効果を求めない修学旅行への批判

明治20年代後半から始まった福岡県小学校の修学旅行は、明治末期には一定の普及をみた。こうした普及の中で修学旅行には様々な問題も見られるようになっていた。修学旅行に関する論議は、『福岡県教育会会報』（以下、『会報』）に展開された。1909（明治42）年から翌年までの2年間、4本の論文を掲載した。

最初の論文は朝倉郡支会員の浦山一雄が発表した「修学旅行に対する準備の仕事」である⁽²⁵⁾。冒頭に「六年有半實際教鞭を握った」教歴や自ら引率した修学旅行の実体験に依拠しつつ、修学旅行における「準備の仕事」の重要性を論じた。「修学旅行なるものは活きたる教授である、活きたる訓練である。実際自然的の現象、進歩発達の様態等を観察せしめ、思想を豊富ならしむることは、全く修学旅行によりて取得すべき賜」であると修学旅行の教育的意義を高く評し、「単に課業を休み少なからざる費用を要する点から考へても、如何にこれを有効ならしめて、其利益を収めえねばならぬかは明瞭である」と修学旅行の成否を教育的効果に求めた。さらに「無意味に生徒を率廻し、よく遊ばせて無事に帰れば、事済みたりとなすの類」や「恰も弥次郎兵衛喜太八の道中談を加味した様な、滑稽の幕を演じるものもあるし、生徒が騒いでも、不規律でも、何も修得することがないでも、一向無頓着なる人もないとはいえぬ」と意識の低い教員を戒めている。

浦山として修学旅行に遊びの要素を否定するわけではない。「勿論修学旅行なるものは、生徒にとっては頗る晴の旅路なれば、或る場合は大いに遊ばせることもあろう。大いに叫ばしむることもあろう」と述べている。しかし、娯楽だけでは「満足な旅行として、誰も賛成できぬ、否、むしろ大に失敗したる修学旅行だ」として、本質はそこにあるのではないことを強調した。教育的効果を求めない修学旅行は「悪徳の養成会となって、其効果の無いばかりでなく、寧ろ甚だ危険」であると指摘し、「失敗したる修学旅行」の根本的な原因として「世の教育者としてあまり旅行を軽視し、殆ど無感覚にすごすので、其の最も大切なる修学と云ふことを、念頭より逸せる缺陷に相違ない」と取り上げ批判した。

浦山からみれば、「修学」を目的とする旅行は教師としての教育行為であり、「間断なく機会をとらへて知識を与え、観察力を鋭敏ならしめ、其間津々たる興味を湧しむる可く、たくみに操縦していかねばならぬ。殊に休憩時及び夜間のごときは、徳育上衛生上最も注意を要するときである」とその全体を教育内容として扱う必要があるとしている。したがって「教師は旅行中は勿論寸毫の間隙なく、生徒に心を注ぎ、且旅行の終りを告ぐるや、一時自己のエネルギーは全く消費して、心身綿の如くなる可き迄、親切にして熱心なる努力を要すべきこと」と述べた。

浦山がいう「熱心なる努力」は「準備の仕事」に尽きる。具体的には各生徒に「旅行すべき地方の大体の地図及び見物す可き場所を明記せる拡大図、見物す可き順序及び説明を掲載したる紙片」を配布すること、説明を通して「前以て旅行す可き地方の大体を丸呑みに呑み込ませ置」くこと、「旅行す可き目的を其都度知らせると共に、これに対する要求は、必ず十分に観察をとぐ可きことを約束して置く」ことである。

浦山の批判は成熟しつつある修学旅行の理論形成への投石であった。彼の批判は波紋をよび、翌年には論文3本が同誌に掲載された。次にこれらの理論を見てみる。

(2) 修学旅行をめぐる理論の展開

浦山の論文の8か月後、『会報』には三池郡銀水高等小学校教員の多田参郎と田川郡伊田尋常小学校訓導の青木頼雄の論文が掲載された。

多田は「小学校高学年における修学旅行方法」と題する論文を2か月に分けて連載し、序論と結論の他、「修学旅行前の準備」と「出発より帰校まで」について論を展開した⁽²⁶⁾。青木は「修学旅行に関する調査」を発表し、「修学旅行の目的」、「修学旅行と旅行との区別」、「修学旅行の価値」、「修学旅行の程度」、「隊の編成法」、「修学旅行に対する準備」、「旅行中の心得」、「旅宿の心得」、「修学旅行の結末及整理」という9項目で調査の結果を纏めた⁽²⁷⁾。多田は修学旅行を「学術研究の為に旅行することにして、規模の大なる校外教授と遠足を兼ねたものと云ふてよい」と解釈し、浦山の「修学」を目的とする旅行の観点と基本的に一致していた。このような観点を持つ多田は、修学旅行の目的は「狭小なる区域内に生活せる児童の見聞を広め、其経験界を拡張して、其觀念界の内容を豊富ならしむるにある」のであり、主に小学校の修学旅行については「其教育的価値を大略分類してみれば」、「教授（知識）」、「訓練（感情・意志）」、「養護（身体）」の3部分にあると述べた。「教授（知識）」の目標は「各科智識の实地観察攻究（殊に実科的諸科につきて）」と「実社会の状況を知らしむること」であり、「養護（身体）」の目標は「身体の鍛錬」であるとした。「教授（知識）」と「養護（身体）」は、これまでの論と同様の主旨であった。

ところで、多田が「訓練（感情・意志）」の目標を「個性の観察、師弟間の情誼を厚うすること」、「同情心、共同一致心、友愛心の涵養」、「克己、忍耐、自信、勇気等の養成」と具体的に示したことは、これまでの論を超え、修学旅行の理論を発展させたものであるといえる。つまり、多田は、修学旅行は単なる学びや遊びではなく、ともに旅し、同じ宿に泊まることによって教師（大人）や同級生（友人）と交流し、学校や教室では実現できない心の解放を通じたコミュニケーションを図り、生活体験を豊富に積み重ねる機会であるとする。また、「克己、忍耐」という旅の苦勞を自分の力で乗り越えることによって手に入れた「自信、勇気」は、「狭小なる区域内に生活せる児童」にとって大いなる成長の喜びが得られる機会でもある。

こうした旅の良さを最大限に生かすため、多田は「然れども其準備と方法の如何によりては、啻に如上の教育的価値を遺憾なく挙ぐることは能はざるのみならず、却て意外の失敗と弊害とを醸すことなきを保せず」と、浦山の「準備」重視論を踏襲しながらも、旅行中の教育「方法」論の重要性を新たに強調した。「方法」論について、多田は「一、出発に際しての訓諭」、「二、旅行中における注意事項」、「三、旅行中に於ける観察並に教授の方法」、「四、旅行中の訓練的の事に就て」、「五、宿泊に際して」、「六、養護即ち身体に関して」の六項目に分けて具体的に述べた。とりわけ「訓練（感情・意志）」に関する項目については、「四、旅行中の訓練的の事に就て」を中心として全文にわたって論を展開した。冒頭で多田は「修学旅行が、単に教師児童の研学の為のみのものでない」と述べ、「如何にせば、これ等の教育的価値を充分に挙げ得るか」と云ふ考は、常に吾人の胸中に置かねばならぬと思

ふ」と強調したが、「無論訓練なるものが、単に数日の短時日間に十分に完成し得る事は到底出来難き事である」としながら、「『機会を利用し、方便を善用せよ』てふ訓練の方則より、我等は数日の旅行中に、出来得る丈けの効果を挙げたいのである」と述べ、「訓練の基礎的方面」と「訓練の实际的方面」からより具体的な目標を立てた。「訓練の基礎的方面」について、多田は「1、師弟間の情誼を暖むること」と「2、個性の観察」から論じた。「我等が小学校児童たりし十年前熊本県下に修学旅行せし事があったが、教室内にては唯厳肅なる先生として、畏敬だけはして居たが、数日の旅行中に、実に懐かしきよく心の密接した様な心となりて甚だ愉快に感じた事がある」と自らの人生体験を用いて、「起臥苦楽を共にするこの旅行ほどよく児童に接する機会はない…共に愉快に談じ共に楽しく学ぶと云ふ事が必要である」と教師と生徒がお互いに理解していく世代間交流の重要性を強調した。また、「寝食坐臥の機微の間に個性観察の機会が多いから、殊に充分の注意を怠ってはならぬ」と修学旅行を生徒の個性観察の絶好の機会とした。「訓練の实际的方面」については「1、友愛、同情、共同一致等の他人に対する諸徳の涵養」、「2、克己、自信、忍耐、勇気等自己に対しての諸徳について」、「3、高尚なる感情即ち情操の養成に就いて」から論じた。最も大切なことは「苦楽を共にすると云ふ事から、友愛同情の心を起し、共同に行動すると云ふ事から共同一致の心を養ひ得るものである」。それを実現するため、「教師は児童に対して同情深ければ、児童も亦これを学ぶのであるから、教師の行動は常に児童に同情する事に基かねばならぬ」と教師に示範を求めた。「困難に陥りし者は互に扶け合ふ様にせねばならぬ」とか「大きな事の一にて出来難く、共同して成功せねばならぬ」として、生徒たちが語り合い、共同作業を通じて初めて自己実現できるという確信を抱かせることができた。また、「僅少なる困難障害の為に猥りに他人の助けを乞はせざること」とも指摘し、自立の重要性も指摘した。「克己、自信、忍耐、勇気等自己に対しての諸徳」はこうした生活集団でこそ実現できると考えたのである。

さらに多田は「知的情操」、「美的情操」、「宗教的情操」から「情操の養成」を述べた。「自ら判断及自から推理によりて發明する所あらしむること」や「自己の見聞せまく無知無能なるを認めて勤勉努力の刺激たらしむること」は、「知的情操」の養成であり、生徒たちからの「發明」やそれを支える「見聞」を広げようとする気持ちを促すことの重要性を主張した。また、「努めて美麗なる山水、豪壯なる海岸山嶽に接せしめ宇宙萬有の宏大無辺なる事を知らしむること」、「天地の大と自然の巧妙なる配合を知らしむること」や「神社、仏閣教授観察の際勉めてこの辺の注意を怠らざること」などとして、自然や神仏に対する崇敬の念を育むことを目指した。

この「訓練（感情・意志）」に関する要素は、「一、出発に際しての訓諭」などにも見られる。「最も尊崇する校長の出場を願ふて、簡單なる訓諭を聞くことは最も大切なる事」とし、その内容を「此度の旅行は、名の如く実際の学問研究の為めに行うのですから、一寸した事にも、深く意をとめて出来るだけの研究をせなくてはなりません」と述べた後、「途中には険しき山も大きな河もあるのでしょう。又雨にさらされ風にうたる様なつらい事もありませうが、此等の難儀にまける様ではいけません、常々学校で鍛った身体力を十分に、あらはさねばなりません」とこれから待ち受ける修学旅行中の困難について話をした。また、「五、宿泊に際して」には「疲れし身体を風呂場の水と共に洗ひ落し、煎餅齧りながら一室に数多の児童を集めて、煌々たる旅館の灯下に、談話する旅行教師の

楽しみ程大なるものあるまい」と宿での時間も修学旅行ならではの教育の機会であると述べた。多田はこうした論の展開を踏まえた上、「教授」と「訓練」が修学旅行の柱であると述べ、「而して、其行動としては、極端ならざる自治自学を以て標榜する事が出来ると思ふ」と結論付けた。多田から見れば、修学旅行は森有礼の「行軍」や高嶺秀夫の「学術研究」より「旅行」そのものに教育的価値があるといえる。

4. おわりに

本論文は、明治期福岡県の太宰府尋常小と市杵高小の修学旅行を事例として取り上げ、遠足や修学旅行の実態をできる限り明らかにした。太宰府尋常小の遠足は、運動会という名で始まった。その背景には小学校令の公布に伴う授業料の増加による退学者の急増があった。運動会はこうした困難を乗り越えるための試金石となった。5キロも離れた自然の野原に行くことを通して、子どもの心を解き放し、感性を磨き、学びの意欲を刺激することは、学校教育の宣伝に繋がり、就学勧誘の目的が達成できると考えられたのである。この教育的意義が示された遠足型の運動会は次第に発展し、最終的に遠足として定着した。遠足の教育的価値を実感した太宰府尋常小はその後に博多日帰りの修学旅行を行った。市杵高等小は久留米・太宰府修学旅行を行った。もっとも大きな特徴は徒歩の時間や距離の長さである。旅の楽しみは苦労と困難があるからこそ味わうことができることを子どもたちに体感させたのである。

修学旅行の普及に伴い、その理論と方法も模索されるようになった。修学旅行は娯楽だけではなく、修学を目的とするため「準備的仕事」の重要性が論じられた。さらに、修学旅行は横断的に教科知識を学ぶだけでなく、旅の苦労を通じて生活体験と共に旅する先生や生徒同士との世代間交流などコミュニケーションを図る場であり、他者を受容する心と自己を実現する力の養成ツアーでもあるとされた。こうした教育旅行の歴史的基盤を明らかにすることによって、今日の理論構築に歴史的根拠を提示できれば幸いである。

謝辞：『太宰府尋常小学校沿革誌一』は、太宰府市立太宰府小学校校長園田正斉氏のご厚意により入手することができた。貴重な時間を割いて複写を用意して下さった氏にこの場を借りてお礼申し上げます。「児島家文書」と「戸田豊彰家文書」は、太宰府市公文書館、筑紫野市歴史資料館の許可を得て利用した。ご協力に感謝いたします。

注

- (1) 寺本潔 (2014). 「沖縄県の小学校における観光基礎教育の授業モデル構築と教材開発に関する研究」, 『論叢』, 玉川大学教育学部紀要, 73-85 頁.
- (2) 吉川三恵子 (2002). 「観光教育 (観光に基づく教育) 論序論-『生きる力』を育む真の観光教育とは-」, 『日本観光学会』, 第40号, 63-86 頁.
- (3) 「観光立国教育について」2015年10月1日閲覧
<http://www.mlit.go.jp/common/000035749.pdf>.

- (4) 『太宰府尋常小学校沿革史一』（1891年作成、太宰府市立太宰府小学校所蔵。現任の太宰府市立太宰府小学校校長園田正斉によると、この沿革史は初代校長大和充彦が作成したものである。なお、句読点は筆者注。以下同）。
- (5) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (6) 宮川秀一（1985）。「明治前期の小学教員－とくに補助員・授業生について」、『大手前女子大学論集』, 19, 137-156頁。
- (7) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (8) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (9) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (10) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (11) 『太宰府市史 通史編Ⅲ』, 375頁。
- (12) 戸田きくの「作文帳」、筑紫野市歴史博物館所蔵『戸田豊彰家文書』, 2636頁。
- (13) 浜野兼一（2004）。「小学校の運動会に関する史的考察－運動会の萌芽期にみる事例分析を通して－」, 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』, 別冊12号-1を参照。
- (14) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (15) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (16) 広辻信次郎「事務報告」、筑紫野市歴史博物館所蔵「議案第一号 福岡県筑紫郡大野村外七ヶ町村学校組合明治三十七年度歳入出総計予算」と「議案第二号 本組合明治三十七年度村税金ハ明治三十六月一日ノ地租同十一月一日ノ戸数ニヨリ分賦シ左ノ期限ニヨリ徴収スルモノトス（後略）」という2つの議案史料に添付。
- (17) 水原克敏（1990）。「近代日本教員養成史研究－教育者精神主義の確立過程」, 風間書房を参照。
- (18) 「年表・修学旅行の歴史」, 『教育旅行白書～修学旅行を中心として～2008年版』, 100頁。
- (19) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (20) 前出『太宰府尋常小学校沿革誌一』。
- (21) 前出、広辻信次郎「事務報告」。
- (22) 「修学旅行日記摘要」, 『福岡県教育会雑誌』, 第7号, 1892年1月22-24頁。
- (23) 浦山一雄「修学旅行に対する準備の仕事」, 『福岡県教育会会報』, 第128号, 1909年4月, 8-13頁。
- (24) 前出、広辻信次郎「議案第一号 福岡県筑紫郡大野村外七ヶ町村学校組合明治三十七年度歳入出総計予算」。
- (25) 前出、浦山一雄「修学旅行に対する準備の仕事」。
- (26) 多田参郎「小学校高学年における修学旅行方法」, 『福岡県教育会会報』, 第140号, 1910年1月, 26-30頁。と、多田参郎「小学校高学年における修学旅行方法（承前）」, 『福岡県教育会会報』, 第141号, 1910年2月, 20-26頁。
- (27) 青木頼雄「修学旅行に関する調査」, 『福岡県教育会会報』, 第140号, 1910年1月, 30-36頁。